ようこそ冬の小鳥たち

すぐ逃げる日本の野鳥

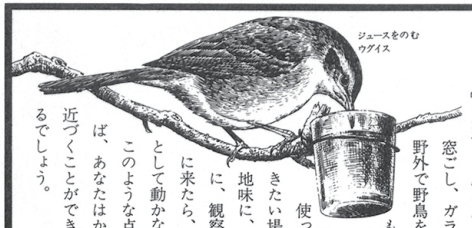
皆さんが野鳥に気づいたとき、まず最初に感じる疑問は『どうして野鳥は逃(にげ)足が早いのだろう』ということではありませんか。ほんとうに私たちのまわりにいる野鳥たちは、ヒトを見ればすぐ逃げてしまいます。ところが、ヒトを見ても逃げないトリがいて、それには二つの形があります。一つは、北極で繁殖し、海上ではとんどの時間をすごすヒレアシシギのように、人間というものを知らない場合で、人間を危険な動物だとする認識を持ったことがないので、逃げたりはしません。もう一つはイギリス・ロンドンの公園にいる野鳥で、一生の大部分を人間とつき合っているのですが、人間のほうが彼らに危険を与えることがないので、逃げるどころか近寄ってさえくるのです。

こうしてみると、日本の野鳥たちの逃足が早いのは、日本人のつき合い方に問題があったのではないかと思います。石をぶつける、巣から卵やヒナを取る、捕えてカゴに入れる、食べる、狩猟の獲(えも)物にするといったつき合い方では、いつまでたっても野鳥たちと友だちになることはできないでしょう。野鳥と友だちになるために、野鳥を見たり、庭に野鳥が来やすい環境をつくってやるということが、もっと行なわれてよいと思いますし、こうした積みかさねで日本の野鳥たちも、私たち日本人を信用するようになると思うのです。

とはいえ、現実に日本の野鳥は人間を見るとすぐ逃げます。それで、見る、観察するということをするためには、『驚かさないこと』が第一で、庭の鳥を見るのなら窓ごし、ガラスごしで。野外で野鳥を見るときでも彼らの安全距離のそとで双眼鏡を使ったり、近づきたい場合は服装は地味に、そして静かに、観察できる位置に来たら、一ヵ所にじっとして動かないことです。このような点に注意すれば、あなたはかなり野鳥に近づくことができるようになるでしょう。

メジロ

あぶら身を食べるシジュウカラ


ジュースをのむウグイス

野鳥を見ることの意義

野鳥を庭へ呼び、声を聞き、姿を見て楽しむ。それは、トリとヒトとが対等につき合い、彼らの自然界での自由な行動を見ることを通じて、野鳥たちが快適に棲(す)める自然環境づくりを考えるという、意義のある第一歩です。ご承知のように、いまほど地球的な視野から資源問題、環境問題が叫ばれていることはありません。これは、人間が『自然』を打ちのめし、あるいは奪い取るかたちで自然とつき合ってきたことへの反省の意味があるはずです。すでに痛めつけられている自然に向かって、狩猟とか、カゴで飼うとか、剝(はく)製にするというような、自然界から野鳥を切り離す行為を続けていたのでは、自然に対してさらに圧力をかけることになります。庭に巣箱、エサ台、水場を置いて冬の野鳥を呼ぶ。それは繁殖に必要な巣づくりの場所を与え、冬の間のエサ不足から野鳥の命をまもり、個体数を増やすことであり、害虫による森林の被害をくいとめることにつながります。

さらにそれが自然保護や環境保全への正しい理解へと発展していくことを、私たちは願っています。

いま、人里に来る冬の野鳥たちは、この図のほかにも、トビ、キジ、コジュケイ、キジバト、シジュウカラ、カケス、ヒヨドリなど。ちょっと山へ行けば、ヤマガラ、エナガ、アオゲラ、コゲラ、キセキレイ、アトリ、イカル、マヒワ、ヤマドリ、ルリビタキ、キクイタダキ――まだまだ見つかります。身近にできる自然保護の第一歩を、庭に野鳥を呼び、そして野外で野鳥を見ることから、始めてください。

柿の実を食べるムクドリ

水をのむジョウビタキ

ヒトの心の中に「トリの保護区」を

財団法人日本鳥類保護連盟
サントリー株式会社

●この広告は、財団法人日本鳥類保護連盟の指導を得て、サントリー株式会社がシリーズとして制作、次の各紙に月1回、掲載しているものです。ご愛読ください。
朝日・毎日・読売・サンケイ・中日・中国・山梨日日・北海道・西日本・下野

53.12A-SA09